

- 1 花咲いて頬の内側よく噛む日
- 2 会うごとに縮みゆくひと春炬燵
- 3 卒業期画家の名前の喫茶店
- 4 水槽に蛸の吸盤春の月
- 5 目を開けて眠る魚に春の雨
- 6 春愁トイレに青き水流れ
- 7 梅を見ていて頭蓋骨白くなる
- 8 ぼろぼろと梅が咲く日のつけまつげ
- 9 人間の頭重たき遅日かな
- 10 春の私うずまき管をふたつ持つ
- 11 蝶の眼の中でわたしが裏返る
- 12 春の夕暮れ砂場から魚の歯
- 13 春キャベツ剥いても剥いても夢のまま
- 14 青く青く、サ行で悲しめば春だ
- 15 目を閉じて眠る魚に春の雪
- 16 枝も幹ももがくかたちで桜咲く
- 17 桜咲く遠いところに鯨の背
- 18 うつ伏せに寝るとき桜川へ散る
- 19 キッチンで寝ましよう星も春めく夜
- 20 夏近し打てば響いてホームラン
- 21 はつなつのキャッチャーフライ高すぎて
- 22 風鈴屋ありて城無き城下町
- 23 カレー屋の換気扇より夏兆す
- 24 熱風の細く流れる部屋棟
- 25 廃車より夏草生えし盆地かな
- 26 夏の野にタイヤ半分生えており
- 27 夏雲のひとつ動かず美術室
- 28 式日の朝顔濡れていたりけり
- 29 雨降れば裸足で入る父の書齋
- 30 梅雨明けて電線多き首都である
- 31 負け癖や糸瓜やたらとよく育つ
- 32 酔い覚めの水をサボテンにもあげる
- 33 泡立たぬ歯磨き粉あり帰省する
- 34 ガレージの前は花火をするところ
- 35 物置の奥に消火器夜の秋
- 36 坂道に弱い車や夏の雲
- 37 黒蝶や水たつぷりと太平洋
- 38 母老いて顔を濡らさず泳ぎけり
- 39 二十歳という青野を憎んでやろうじゃないか
- 40 東京の森は霊園夏の雨
- 41 昼寝覚め左右で違う乳房かな
- 42 忘却の果てに真夏のスノードーム
- 43 金魚にはなれず絵の具を溶いている
- 44 キッチンの床冷たくて金魚死ぬ
- 45 サングラスの中でおどけてみせてやる
- 46 ゆっくりと殺し合いたい西日かな
- 47 ストロローを噛んで豪雨の原爆忌
- 48 夕立の手とか足とか持て余す
- 49 血迷えず遠き烏賊火を見ておりぬ
- 50 夕焼けるアジアの隅で肉を焼く

75 寒すぎて笑うどうにもならない二人  
 74 手袋の下に指輪のあるらしく  
 73 むちうちのようにマフラー巻きし人  
 72 冬はじめピアノの上の花瓶かな  
 71 先生のまつげの影も冬めいて  
 70 人撥ねし列車に乗りて枯野まで  
 69 曼珠沙華抱けばすなわち迷子なり  
 68 木も森も顔に見えたる星月夜  
 67 山肌に墓地が見ゆれば秋の旅  
 66 哀しくて林檎を袖で磨きけり  
 65 秋晴や視線ずらすという返事  
 64 パレードに銀杏散りゆく日本晴れ  
 63 秋冷の底なるコインランドリー  
 62 流星を待つ弟の首の骨  
 61 セイロンの茶葉が溺れる十三夜  
 60 デニーズの外は海かも良夜かな  
 59 秋蝶や巨大壁画の天使の死  
 58 匂いつつ白桃熟れる夜の鹿  
 57 体内の海に月光満つるかな  
 56 保健室色なき風を眺めけり  
 55 壁を向き寝れば秋蝶華やいで  
 54 秋出水眺めるひとりひとりかな  
 53 明け方に通り雨ある魂祭  
 52 星合にささめく音の製氷機  
 51 じゃがいもを潰す厨の暗さかな

100 許されたように雪野に立ち尽くす  
 99 致死量の枝毛 冷たい海がある  
 98 自らに無口となりて冬のダム  
 97 宇都宮とは冬雲のきれいな街  
 96 横顔を窓に映して冬の旅  
 95 死火山に雪降り積もり閉架図書  
 94 ストーブの前で待たされ献血す  
 93 いつもより人と目の合うマスクかな  
 92 東京の顔に戻りて初仕事  
 91 語られぬことと雑煮のある広間  
 90 なんかもうどうでも良くて葱だらけ  
 89 葱刻む故に我あり悔し泣き  
 88 セーターの毛羽立つ実家暮らしかな  
 87 蝋燭は白く生家は冬ざるる  
 86 クリスマス絵本の森の恐ろしき  
 85 冬の夜の硬さにチーズケーキ焼く  
 84 悲しくてショートケーキの苺かな  
 83 風花や火傷の舌を隠し持つ  
 82 なんとなく大人になれば海に雪  
 81 瞬けば23区に雪が降る  
 80 寄せ鍋に寄らぬ心のひとつふたつ  
 79 同志集へり皆ジャージにマフラーで  
 78 愛欲のごとくにズワイ蟹を食う  
 77 失恋の友と鯨を食べにゆく  
 76 深海に雪降る夜の紅茶かな